

浮舟と織女

——明石の君との比較から——

大竹明香

はじめに

浮舟は、物語世界に語り出されてからしばらくのあいだ、その内面がほとんど語られることのない女君であるが、彼女の運命、行動を牽引していくのは、母中将の君である。浮舟の運命を決定づける重要な叙述が、東屋巻に語られる中将の君の心内語にある。

① この御ありさま容貌を見れば、七夕ばかりにても、かやうに見たてまつり通はむは、いとみじかるべきわざかな、と思ふに、若君抱きてうつくしみおはす。
(東屋⑥四三)

② この御ありさまを見るには、天の川を渡りても、かかる彦星の光をこそ待ちつけさせめ、わがむすめは、なのめならん人に見せんは惜しげなるさまを、夷めきたる人をもみ見ならひて、少将をかしこきものに思ひけるを、悔しきまで思ひなりにけり。
(東屋⑥五四)¹⁾

①は匂宮を目の当たりにした際の、中将の君の心内語である。

「七夕ばかり」つまり、年に一度の逢瀬でも良いから、匂宮のような高貴な人と浮舟を娶わせたいとの思いが表れている。このような母の思いは、②において薫を目の当たりにした際にもう一度語られる。②では、娘に「彦星の光をこそ待ちつけさせめ」、つまり高貴な薫を彦星に喩えて、何としても娘の相手にはそのような人を、との思いである。

ここで注目されるのは、この浮舟の運命を決定づける①②の母の心内語に、七夕表現が見受けられることである。①②に共通するのは、匂宮や薫の姿を見た母の心内語において、貴人との稀有な逢瀬を娘に願う意であるが、その意を表出するために、七夕表現がくり返し用いられているのである。²⁾

さて、本稿が問題としたいのは、①②の二重傍線部「通は」「渡り」の動作主についてである。①②の傍線部については、たとえば『新編日本古典文学全集』が、①「年に一度の七夕ぐらいの逢瀬であっても、こうしてお目にかかれるのだったら、まったくすばらしいことだろう」、②「天の川を渡って年に一度の訪れでも、こうした彦星の光を待ち迎えさせるようにしてやりたいものよ」

と訳出しているが、「通ふ」「渡る」の動作主が誰であるのか曖昧なままとなっている。「通ふ」「渡る」の動作主は高貴な男性なのか浮舟なのか。「通ふ」「渡る」などの天の川を渡河する動作主が誰なのかを比定することは、物語における浮舟のあり様に大きく関わることだと考えられる。なぜなら、浮舟は、渡河する動作主が高貴な男性であれば「男を通わせる女君」、渡河する動作主が浮舟であれば「男の邸に参上する〈召人〉」ということになるので、渡河する動作主が男なのか女なのかによって、その意味が大きく変わるからである。なお、小稿では、男の邸に参上して寵愛を受ける女性を〈召人〉と言うこととする。³⁾

一 古代日本文学における七夕伝説表現

そこで、天の川を渡るの誰なのかについて考えるために、まずは中国で発生した七夕伝説の日本における変容について整理することからはじめたい。たとえば『歌枕大辞典』の「天の川」の項には、中国で発生した七夕伝説が日本に伝来したことについて、早くは『万葉集』に見える一三〇首の七夕歌において、「天の川」の語が多く用いられていることを説明する。くわえて、「中国では渡河するのは織女で、日本でも『懐風藻』の詩句などはこれを受けるが、和歌では男が女のもとに通う婚姻形態を反映して、牽牛が天の川を渡り織女に逢いに行く」と詠む例がほとんどである」とし、また同「七夕」の項も、彦星が舟で渡河する様子が詠まれる歌がほとんどであると説明する。⁴⁾

そのとおり、中国の六朝時代に書かれた志怪小説『続齊諧記』

には、織女渡河に関する記述が見える。唐の類書『芸文類聚』所収の該当部分を引用する。⁵⁾

続齊諧記曰。桂陽城武丁。有仙道。謂其弟曰。七月七日。織女当渡河。諸仙悉還宮。弟問曰。織女何事渡河。答曰。織女暫詣牽牛。世人至今云織女嫁牽牛也。

ここでは、織女が渡河すること、織女が牽牛に嫁すことなどが説明されている。このように織女が牽牛のもとへ渡っていく中国の七夕伝説の影響を受けて、日本で作られた漢詩においては織女が渡河するものが多く、たとえば、『懐風藻』には、

五言。七夕。一首。

雲衣兩觀夕。月鏡一逢秋。機下非曾故。梭息是威歎。

鳳蓋隨風轉。鵲影逐波浮。面前開短樂。別後悲長愁。

とあり、織女が渡河する際に乗る車「鳳蓋」の語が詠まれている。⁷⁾

しかし、次にあげる『万葉集』の歌のように、日本に伝わり和歌に詠まれるようになる過程において、日本の婚姻形態を反映させて渡河するのは牽牛となっていたようである。

彦星の 川瀬を渡る さ小舟の え行きて泊てむ 川津し思ほゆ (巻第十一 二〇九一)

ただし、『万葉集』には、牽牛と織女の間にも渡河するよう

に解釈できる歌や、織女が渡河する様を詠んだ歌がある。⁸⁾

彦星し 妻迎へ舟 漕ぎ出らし 天の川原に 霧の立てるは (巻第八 一五二七)

天の川 棚橋渡せ 織女の い渡らさむに 棚橋渡せ (巻第十一 二〇八一)

一五二七番歌では「妻迎へ舟」の語があり、これは男が女を迎

えに舟を出し、一緒に川を渡ると詠まれているのである。『新編日本古典文学全集』では牽牛と織女の渡河という「折衷の形式」を取る歌であると指摘されている。また、二〇八一番歌は、織女が橋を渡ることが詠まれている。このように、『万葉集』の和歌においては、中国の七夕伝説の影響も見受けられるのである。

このような『万葉集』における七夕歌の特徴については、小島憲之氏が漢詩的要素を如何に萬葉的にこなすかに萬葉歌人としての努力があったと述べ、漢詩的要素からの表現の変容について指摘している。

これに対して、『万葉集』だけでなく、『古今和歌集』以降の和歌においても織女渡河を詠んだ歌が多く見出せることを指摘するのが吉川英治氏である。吉川氏の指摘において、明確に織女渡河が詠まれているものには、たとえば以下の和歌がある。

今宵織女渡天河

一とせにただ今宵こそたなばたの天のかはらも渡るてふなれ

七日 『千里集』(四〇)

ひさかたの天の川ぎりたつときはたなばたつめの渡りなるらむ 『躬恒集』(二七二)

『千里集』詞書に「織女渡天河」とあり、『躬恒集』では明確に「たなばたつめ」とあり、これらは織女渡河を詠った作である。詞書や詠まれ方から、これらは漢詩を意識して詠まれたものだろう。

このように、織女が渡河すると詠まれる歌が平安朝に多少あるけれども、物語の作中人物の恋と七夕が結びつく場合はどうだろう。

うか。そこで、『源氏物語』以前の作品から、渡河が表出されている用例を以下にみてみよう。

①「交野を狩りて、天の河のほとりにいたる、を題にて、歌よみて盃はさせ」とのたまうければ、かの馬の頭よみて奉りける。狩りくらししたなばたつめに宿からむ天の河原にわれは来にけり

(中略) 紀の有常、御供に仕うまつれり。それが返し、

ひととせにひとたび来ます君待ては宿かす人もあらじとぞ思ふ 『伊勢物語』(八二段 一八五頁)

②彦星に今日はわが身をなしてしか暮れなば天の川渡るべく(中略)

天の川今宵もわたる瀬もやあると雲の空にぞ身はまどふべき 『平中物語』(十三段 四七七―四七八頁)

③君たち、御琴ども掻き合はせて遊ばすほどに、彦星天の川渡るを見給ひて、式部卿の宮の御方、

白露の置くと見し間に彦星の雲の船にも乗りにけるかな 中務の宮の御方

秋浅み紅葉も散らぬ天の川何を橋にてあひ渡るらん 右大臣殿の御方

年ごとに会ふと見ながら天の川いく世渡ると知る人のなさ 『うつほ物語』(藤原の君一〇五頁)

④中のおとどの東面なる竹の葉に、かく書きつく。彦星のあひ見て帰る暁も思ふ心の行かずもあるかな……

⑤七月。七夕祭りたる所に。 『うつほ物語』(祭の使二三三―二三四頁)

彦星の帰るにいく代会ひぬれば今朝来る雁の文になるらむ
『うつほ物語』(菊の宴三二六頁)

⑥七月七日、七夕まつれる家あり。

雲もなく空すみわたる天の川今や彦星舟わたすらむ

『落窪物語』(卷之三 一二七頁)

⑦賀茂の奥に、なにさきとかや、七夕のわたる橋にはあらで、にくき名ぞ聞えし……
『枕草子』(第九五段 一八四頁)

男が女のもとへ逢いに行く通い婚を前提として、彦星が渡河すると詠まれている歌がほとんどである(①②③④⑤⑥)。一方、和歌ではないが『枕草子』では、七夕(たなはた)≡織女が渡る橋についての記述がある(⑦)。

以上みてきたように、日本の七夕伝説は中国の影響を受けながらも、渡河の動作主が牽牛であるという、日本独自のかたちにかわりながら表現世界を拡げていったことがわかる。ただし、なかには『枕草子』のように織女渡河を記述するものもあるということが、七夕歌の特徴といえるだろう。

二 「通ふ」「渡る」の動作主

さて、「はじめに」で述べた問題に戻ろう。中将の君の心内語の「通ふ」「渡る」の動作主は、高貴な男性なのか、浮舟なのか。

そこで、①の「通はむ」と②の「渡りても」の解釈について、諸注釈書や先行研究の指摘を確認する。

①について古注では、「通はむ」の動作主についての言及はほとんどない。唯一、『孟津抄』が「母の心に匂にとしに一度なり

ともしたかひ申度と也」と述べていて、「通はむ」について説明している可能性があるが、「したがふ」の意味が不明である。現代注は『日本古典文学大系』補注が「見たてまつり通ふ」は「見通ふ」の尊敬表現で、「相互に見合う」意である」とするが、これが「見通ふ」という複合語とは限らないし、『日本国語大辞典』の「見通う」の項には、「かよって行って会う。一説に、会って心が通う」とあるので、『日本古典文学大系』の考え方には従えない。『源氏物語評釈』は「お見申し上げお通いいたたくのは」、「源氏物語の鑑賞と基礎知識No.6東屋」は「お会いできお通いいたさるなら」、「日本古典文学全集」及び『完訳日本の古典』は「お目にかかりお通いいただけるのなら」とし、『源氏物語注釈』も「お目にかかりお通い頂けるのは」と、「通ふ」の動作主は男であるとす。また『新編日本古典文学全集』の「お目にかかれるのだったら」や、『新潮日本古典集成』の「お逢い申すことができるのなら」など、「通う」について言及していないものもある。なお、『新日本古典文学大系』は、「通はむ」に対して施注がない。先行研究では、吉井美弥子氏が「お目にかかり通つてくれることがあるなら」として男が通うと解釈している。つまり、①の「通ふ」については、男が通うという解釈と「通う」動作主が判然としないものと二分される。

②については、古注では「渡る」について言及しているものはない。現代注では、『日本古典文学大系』が「天の川を渡って、年に一度逢うだけでも、浮舟に、彦星のこんな光(立派な方)をこそ、婿と言って、待ちつけさ(通わ)せたいものである」とす。〔通わ〕せたい」とあるが、「浮舟に通わせたい」あるいは

「浮舟に男君を通わせたい」と、二つの意味に取れるため、「渡る」の動作主は不明である。『源氏物語評釈』は「天の川を渡ってでも、このような彦星の光の到来を待ち受けさせたいものだ」とし、『日本古典文学全集』や『完訳日本の古典』、『新潮日本古典集成』も同様の説明をする。「天の川を渡ってでも」は「年に一度の稀な逢瀬でも」との意にも解せるので、動作主が男なのか女なのか不明である。『新編日本古典全集』は「天の川を渡って年に一度の訪れでも」、『源氏物語の鑑賞と基礎知識No.6東屋』の「天の川を渡る一年に一度の逢瀬でも」との訳出は、渡る動作主について判然としない。また『新日本古典文学大系』は、「渡りても」に對しての施注をしておらず、『源氏物語注釈』は、渡る動作主への言及はない。なお吉井氏は、「天の川を渡ってでもこうした彦星の光を待ち受けさせてやりたい」との訳出をしているが、動作主は浮舟だろうか、不明である。

以上のように、①②共に渡河の動作主が判然としない訳や説明がなされているものがある中で、①については男君が「通ふ」とするものが散見される。

このように解釈が定まらない中で、奥真希子氏が①②ともに動作主は浮舟であることを指摘している¹⁶。本稿では、奥氏の解釈を重要視したい。なぜなら、「通ふ」「渡る」には尊敬語が付いていないので、動作主は匂宮や薫ではなく、浮舟となる可能性が高いと思われるからである。

①では「この御ありさま容貌を見れば」において中将の君が匂宮の姿を七夕と重ね、「かやうに見たてまつり通はむは」と続く。「見たてまつり」は「浮舟が匂宮の姿を拝見する」の意で、「たて

まつり」は匂宮に對する敬意を表している。「見たてまつり」の主語が浮舟であるから、直下の「通はむ」の主語も浮舟であるとするのが自然な文の流れであろう。ここで重要なのは、「通はむ」に尊敬語が付されていないことである。匂宮が「通はむ」の主語であるならば「通ひたまはむ」などとはあるはずではないだろうか。たとえば『更級日記』には、①の場面を意識しているとされる以下の叙述がある¹⁷。

「いみじくやむごとなく、かたち有様、物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年に一たびにても通はしたてまつりて、浮舟の女君のやうに、山里にかくし据ゑられて、花、紅葉、月、雪をながめて」……(三一四頁)

浮舟のように山里に「かくし据えゑられ」といって孝標女の憧れが述べられていることには、光源氏のような貴公子を年に一度でも自らのもとに「通はしたてまつりて」とあり、「通はず」に謙讓語の「たてまつる」が付されている。孝標女と貴公子との間には身分差があるので、貴公子に對する敬意を表すために敬語が付されているのである。

このように、男君との身分差を女君の側が自覚している場合は、①の「通ふ」の動作主が匂宮であるならば敬語が付されているはずである。しかし、敬語はない。よって、尊敬語が付されていない「通はむ」の動作主は浮舟であると考えたい。

②では薫のことを「この御ありさまを見るには」とし、「天の川を渡りても、かかる彦星の光をこそ待ちつけさせめ」と続く。「待ちつけさせめ」は、中将の君が「浮舟に薫を待たせたい」と思うとの意となる。「待ちつけ」の主語が浮舟であるから、直上

の「渡りて」も浮舟が主語であるとするのが自然な文の流れである。使役の「させ」は「渡り」と「待ちつけ」の両者を受けて、「浮舟に天の川を渡らせても薫との逢瀬を待たせたい」との中將の君の願望の意と解すことができる。また、何よりも重要なのは「渡り」に尊敬語が付されていないことである。薫が主語であれば「たまふ」などの語を伴っていると考えられるが、ここには尊敬語が付されていないため、「渡り」の動作主は浮舟であると考へたい。

「通ふ」「渡る」の動作主を浮舟であるとすると奥氏は、浮舟の渡河を「能動的」な女の姿と捉えている。しかし、本稿が問題としたいのは、女が男のもとへ通い、渡るとはどのような意味を有しているのか、ということである。①②の中將の君の心内語にある「通ふ」「渡る」行為が浮舟だとするならば、浮舟が匂宮や薫のもとへ自ら行く、つまり男のもとへ女が渡るといふ「召人」との処遇が表出されてくるのではないだろうか。

三 「通ふ」女君

『源氏物語』において、ある人物が特定の人のもとや場所へ「通ふ」と語られる用例は、七四例確認できる。そのうちほとんどは「通ふ」動作主が男の場合であるが、「通ふ」動作主が女であるものもある。以下にみてみよう。

- (1) 父君のもとを里にて行き通ふ。
(末摘花①二六六)
- (2) 侍従は、齋院に参り通ふ若人にて、
(末摘花①二九一)
- (3) 侍従などいひし御乳母子のみこそ、年ごろあくがれはてぬ者に

てさぶらひつれど、通ひ参りし齋院亡せたまひなどして、……

- (4) おぼろけならでは、通ひあひ見たまふことも難きを……
(蓬生②三三三)

- (5) 「この人も、童よりさるたよりに参り通ひつつ見たてまつり馴れたる人なれば」……
(柏木④二九二)

- (6) 「この宮は、父方につけて、童より参り通ふゆゑはべりしかば」……
(橋姫⑤一六二)

- (7) 「さる方にては御覽せさせばやと思ひたまへし人になん。おのづからさもやはべりけむ、宮にも参り通ふべきゆゑはべりしかば」……
(蜻蛉⑥二二二)

- (8) 若き人の、かかる山里に、今はと、思ひたえ籠るは難きわざなりければ、ただいたく年経にける尼七八人ぞ、常の人にてはありける、それらがむすめ、孫やうの者ども、京に宮仕するも、異ざまにてあるも、時々ぞ来通ひける。
(手習⑥三〇三)

- (9) 見しわたりに行き通ひ、……
(手習⑥三〇三)

- (1) は源氏の乳母子の大輔命婦が常陸宮邸から内裏へ通うこと、
- (2) (3) は常陸宮邸に仕えている侍従が齋院のもとに通って仕えていることを語る叙述である。(4) は明石の女御のそば近くで仕えている明石の君が母の尼君になかなか会いに通うことができないこと、(5) は女三宮の女房小侍従が幼いころより柏木のもとへ出入りしていたことをいう。(6) は弁から薫への発話で、弁が幼い頃より八の宮邸へ通っていたとある。(7) は薫から匂宮への言葉の中に「参り通ふ」とあり、これは、浮舟が二条院へ通う意である。(8) では、小野の妹尼の庵に住まう尼たちの娘や孫のような者たちが、

この庵に出入りしていること、(9)ではそれらの者たちが、かつての自分と関りがあつた薫や匂宮や中の君の邸に出入りする可能性を心配する浮舟の心内語である。

これらに共通することとして、女が「通ふ」という語を伴つて語られる場合は、(1)(2)(3)(5)(6)(9)のように女房として主家や特定の邸に通う場合と、(4)(7)(8)のように親族間の下位者が上位者のもとに向かう場合とがあることが諒解される。

では、中将の君の心内語の①はどうだろうか。敬語がなく、ただ「通ふ」とある場合は女が特定の人のもとへ行く意であるから、通う動作主は浮舟となる。中将の君と浮舟は受領階級の後妻と継娘で、一方の中の君は高貴な匂宮の妻に収まっている。この三人は親族という関係になるが、その身分の差は明確で、匂宮の妻である中の君が上位者であり、中将の君と浮舟は下位者である。

「かやうに見たてまつり通はむ」は、「かやうに」とあるので、上位者である中の君の邸に向いて匂宮の姿を拝見している、下位者中将の君の「今」であり、さらに浮舟にも「かやうに」、自分と同じように、親族の下位者として上位者の中の君の邸へ向いて匂宮にお逢いしたならばどんなにすばらしいことかとの空想が重なる文脈となっている。そして、まさにこの言葉のとおり、この後母は、浮舟を中の君のもとに「通は」せて中の君のもとに預けるのであるが、浮舟はそこで匂宮に発見されて見初められることとなる。

さきに、女が「通ふ」場合の用例を分析する際、女房が主家に通う場合と親族の下位者が上位者のもとに通う場合という二つの分類を便宜的にしてみたが、両者は必ずしも明確に区別できるも

のではない。たとえば(8)では、小野の妹尼の庵に老いた尼が七八人住み込みで、妹尼に仕えているとある。くわえて、その娘や孫たちのような若い女性には山住みも難しく、都に住みながら時々通つて来て妹尼に仕えていることが語られており、つまり娘や孫たちは、親族である母や祖母のもとに女房として通つているのである。かくいう中将の君も、もとは八の宮の北の方の親族であったが、八の宮家に仕える女房に零落したという過去を抱えており、したがって、それはそのまま、中の君と中将の君との関係が主人と女房の関係であることを示すものである。つまり、親族間の下位者は上位者の邸に仕える女房である場合が多く、親族間の下位者は女房に限りなく近い存在なのである。ならば、中将の君の娘で八の宮の認知を受けていない浮舟は、中の君から見れば女房と言つても過言ではあるまい。

また、(7)の蜻蛉巻の用例を見てみると、薫の口から浮舟について「宮にも参り通ふべきゆゑはべりしかば」とあり、二条院の匂宮のもとへ通う縁のある人だ、と語られている。これは皮肉が多分に込められた薫から匂宮への言葉であるが、この薫の言葉からも、浮舟は匂宮の邸に出入りする人、すなわち女房のような人としてその立場が表出されてくるのである。

もつとも、浮舟が女房のような人として匂宮に認識されていたのは(7)の薫の発言よりもずっと以前からである。東屋巻では、中の君のもとへ身を寄せていた浮舟を匂宮が見出した際、「今参りの口惜しからぬなめりと思して」(東屋⑤六〇)とあり、この時匂宮は浮舟を、新参の女房として認識していた。中の君の住まう邸はすなわち匂宮の邸であるから、やはり浮舟は、匂宮のもとへ

通って行ってしまったことになる。したがって浮舟は匂宮に見出されたその時から、匂宮の邸に参った人ということになる。この時浮舟は、匂宮と男女関係になることをかろうじて逃れたが、「浮舟が中の君の邸に向いて匂宮に逢う」という母の空想は、ある意味では実現したことになる。事の次第を聞いた母はあるまじきことと慌てて浮舟を匂宮から引き離すが、実は母の不用意な言葉こそが、この事態を引き寄せたのである。

七夕のように稀な逢瀬でもよいから高貴な男君の邸へ浮舟を通して寵愛を受けさせたいとの母の言葉は、浮舟が女房として男君の邸へ出向いて寵愛を受ける、すなわち〈召人〉待遇の女になるという不本意な意味をも有したものである。母のこの言葉は願望である一方、予言であった。

四 「渡る」女君

そもそも浮舟は、宇治川の向こうから宇治橋を渡って、その姿を現した女君であった。

女車のことときさまにはあらぬ一つ、荒ましき東男の腰に物負へるあまた具して、下人も数多く頼もしげなるけしきにて、橋より今渡り来る見ゆ。田舎びたるものかなと見たまひつつ、殿はまづ入りたまひて、御前どもはまだたち騒ぎたるほどに、この車も、この宮をさして来るなりけると見ゆ。

(宿木⑤四八七—四八八)

宇治に赴いていた薫の眼には、女車が橋を渡って来る光景が映った。この女車に乗っていたのが浮舟であり、浮舟はこの時、

母中将の君と離れて、独りで初瀬詣でに来ていたのであった。薫が浮舟をはじめて見た時、女である浮舟が橋を渡って来たのである。女車に乗って川を渡って来た浮舟。ここで思い起こされるのは、②であげた『平中物語』十三段にある女車である。

この男、いひすさびにけるに、七月になりにけり。さりければ、七日に川原にゆきて、遊びけるに、この男、夢のごとあひて、見もえあはせて、言の通ひは、ときどきいひ通はずの車ぞ、来て、川原に立ちにける。供なる人々見て、いふを聞きて、男、「かう近きことのうれしきこと。これをば天の川となむ思ひぬる」などいはせて、男、

彦星に今日わが身をなしてしか暮れば天の川渡るべく『平中物語』では、平中と恋愛関係にある女の乗った車が川原に止ったことを受けて、男がその川を「天の川となむ思ひぬる」と、男と女車の間にある川を天の川に見立てて歌を詠む。歌の表現からわかるのは、彦星に見立てて男が天の川を「渡る」というものであった。

では浮舟の女車はどうか。宇治川を渡って来るとの描写が意味するものについて、今一度問い直してみたい。『平中物語』が、川の対岸にある女車を見て男女を隔てる川を天の川と見立てるように、薫と浮舟の間に流れる宇治川もまた、天の川を想起させる。しかし、そこに架かる橋を渡って薫のもとへと進んでくる女車に乗った浮舟は、天の川を渡ってきた女君という、彦星が渡河する通い婚を前提とする七夕表現とは対照的な存在となっている。川を男ではなく女が渡ってくるという浮舟のあり様に、浮舟のこれから先の身の上が見られる。「荒ましき東男」「田舎びたるも

のかな」と、薫はこの女車の様子を認識しており、薫と浮舟の身分の差も示されている。宇治川を渡ってきた浮舟は薫の管理する邸へ行き、そこで薫に垣間見されて見初められる。この時二人は男女関係を交わすことはなかったが、ここでも浮舟が天の川ならぬ宇治川を渡って薫のもとへ行き、彦星ならぬ薫の寵愛を待つきっかけを作ったことになる。そしてこの後、浮舟は薫によって宇治の邸へ据えられることとなるのである。

浮舟が男君のもとへ渡る。母の②の「天の川を渡りても、かか彦星の光を待ちつけさせめ」との不用意な、或いは無意識的な表現は、浮舟の行動をある意味で言い当てていたことになる。

以上、第三節で述べた①の浮舟が「通ふ」、ここ四節で述べた②の浮舟が「渡る」という言葉が、その後の浮舟の行動を言い当てるものとなっているのである。

五 二人の彦星

さて、浮舟が薫によって誘われた宇治の邸とは、どのような処だろうか。

薫が大君を偲ぶために、八の宮の宇治邸の寝殿を改築しようと思いついた時、薫はことあるごとに中の君に相談している。理由は、宇治邸の所有権に関わるからであり、「今は、兵部卿宮の北の方こそはしりたまふべければ、かの宮の御料とも言ひつべくになりたり」(宿木⑤四五六)と阿闍梨が語っていることから、八の宮と大君亡きあと、八の宮邸は中の君の有するところとなっていた。中の君が所有するということは、すなわち夫である匂宮に

も所有権があるということになる。これについて三田村雅子氏は、邸を建て・管理・維持しているのは薫であっても、本来の所有者が匂宮であるという二重性は、この邸に迎えられた浮舟をめぐっても、薫と匂宮の双方が権利を主張しようような状況を生み出しているのである。

と述べ、邸の二重性がそのまま浮舟の所有の問題を浮き彫りにすると読み解いている。三田村氏の指摘にくわえて、ここでは、東屋巻にある①②の七夕表現を考え合わせてみたい。

中将の君は、①②において、匂宮と薫、それぞれの男君と娘との縁を願って、七夕伝説に喩えてその心中を表出しながらも、一方では浮舟に特有の性質をも付与してしまっている。

七夕伝説においては、織姫が逢瀬を待つのは彦星ただ一人である。それに対して中将の君の心内語においては、匂宮と薫という二人の彦星との逢瀬を願う浮舟という構図を浮き彫りにさせずにはいない。①②の中将の君の心内語の間には、たった一日という時間の経過しかない。いささか突飛な表現ともいえよう。この一日の時間の中に二度語られる浮舟をめぐる七夕伝説にまつわる表現が、二人の彦星という矛盾を表出するのである。つまりこの表現自体が、後に宇治の新邸に身を置く浮舟をめぐる匂宮と薫との争いを予言する機能を有しているのである。換言すれば、このような浮舟の運命をも、母自身の心内語において導いてしまっているといえるのである。

くわえて、「通はむ」や「渡りても」の語が浮舟の行動と共鳴し、匂宮と薫という男君のもとへ自ら通っていき、自ら渡っていくという不安定な様相をも、この二つの七夕表現は呈してみせる

のである。

六 明石の君と七夕表現

ここからは、川の傍に身を置き男君の訪れを待つ明石の君にまつわる七夕表現と、浮舟とを比較してみたい。浮舟と明石の君をめぐる七夕表現を重ね合わせると、その違いがより鮮明に浮かび上がってくるからである。以下に、明石の君と七夕伝説にまつわる表現を確認する。^①

明石の君は松風巻において源氏の一人娘の姫君を伴って上京し、水辺に近い大堰の地に移った。そもそものは、源氏が造営した二条院の東の院の東の対へ上京するよう何度も言われていたが、明石の君はこれを固辞し、母方に縁故のある大堰山荘へ移ったのである。松風巻の巻末には七夕表現が見出せる。

いかにせまし、迎へやせまし、と思し乱る。渡りたまふこと
いとかたし。嵯峨野の御堂の念仏など待ち出でて、月に二度
ばかりの御契りなめり。年の渡にはたちまさりぬべかめるを、
及びなきことと思へども、なほいかがもの思はしからぬ。

(松風②四二四)

源氏は明石の君の処遇について思案している。理由は、大堰山荘へ渡ることは容易ではないからで、源氏の訪れは月に二回ほどである。これに対して明石の君は、「年の渡」つまり七夕伝説の牽牛と織女の逢瀬と比べれば、まだ良いではないか、と自身に言い聞かせている。

このように、明石の君が川の近くにある大堰山荘に身を置いて

いることを語る叙述において、七夕伝説にまつわる表現が見受けられる。つまり、明石の君の物語において川と七夕伝説の表現は、引き寄せ合うように配置されているといえる。ここで大切なのは、明石の君は川の傍の大堰に移ったが、源氏の「渡り」を待つ立場にあるということだ。源氏と明石の君のこのような関係は、松風巻以前の明石巻の時点から決定付けられていたといえる。

人進み参らばさる方にも紛らはしてんと思せど、女はた、
なかなかやむごとなき際の人よりもいたう思ひあがりて、ね
たげにもてなしきこえたれば、心くらべにてぞ過ぎける。

(明石②二五〇—二五一)

「とかく紛らはして、こち参らせよ」とのたまひて、渡りた
まはむことをばあるまじう思したるを、正身はたさらに思ひ
立つべくもあらず。

(明石②二五三)

明石巻で心比べをしたとき、明石の君と源氏のどちらが行くのか。源氏は明らかに、自らが明石の君のもとへ渡ることなどありえないから、明石の君を自らのもとへ参らせようと考えていたし、そのことは、そのまま源氏と明石の君の身分差を表していた。一方の明石の君はといえば、自ら源氏のもとへ参ることはしない、つまり〈召人〉にはならないということが、自身の立場を支えるものとなることを承知していた。であるからこそ、明石の地では最終的に、源氏を明石の君の住む邸に通わせ、その訪れを明石の君が「待つ」ことに固執したのである。

先に見た松風巻の叙述には、「渡りたまふこと」とあって、これは源氏が明石の君のもとへ「渡る」ことをいう。明石の君は織

女になぞらえられることによって、源氏の「渡り」を「待つ」立場を再度獲得したことを意味し、明石の地で源氏を通わせた女君の、都に上った後の処遇を確認する意味を有しているのである。明石と大堰、それぞれの地において明石の君は、明石一族が用意した邸へ源氏を「通わせる」女君としてその存在が造型されている。

これに対して浮舟はどうか。明石の君と比べると、浮舟の処遇はまったく異なったものとなっていることがよくわかる。浮舟が身を置いた宇治の邸は薫と匂宮の所有するものであって、浮舟の邸ではない。浮舟は二人の男君が所有する邸に参上し、それぞれから寵愛を受けている身であるから、「召人」ということになる。浮舟には、七夕伝説にまつわる表現の始発から、一人の牽牛の渡河を待つ織女の姿は見えない。母から規定された、二人の男君のもとへ自ら渡ってしまうという特異な「織女」としての浮舟の姿が浮かび上がってくるのである。

おわりに

明石の君はその後、六条院へと移ってその身体は川から離れていくが、浮舟は川に近づいていく。

母中将の君は浮舟の幸せを願った。その思いが母娘を動かしてきたはずだが、娘を導いたのは二つの七夕表現であった。宇治の地で二人の彦星の訪れを待つ浮舟は、心は揺れ動き、やがて破綻し、宇治川に「来し方行く末もおぼえて、簀子の端に足をさし下ろしながら」(手習⑥二九六)と、自ら足をおろした。その先に

語られる浮舟にはさらなる苦悩がある。

母中将の君の思考と浮舟自身のあり様は、男君が川を渡るといふ婚姻形態を意識した通常の七夕表現からは軌を逸しており、それはそのまま、通い婚の形態からの逸脱を表出する。ここに、七夕伝説にまつわる浮舟の描かれ方の特徴を、見出すことができるのである。

注

(1) ②に引用した中将の君の心内語にある「渡りても」は、諸本において本文に異同がある。河内本及び別本の御物本、保坂本、池田本は「へたて、も」とする。この部分、諸先行研究は「渡りても」の本文を採用して考察する。小稿でも青表紙本の本文に拠り、「渡りても」とする。

(2) 宇治十帖における七夕伝説の影響については、川邊靖『源氏物語』第三部に見られる七夕伝説の影響をめぐって(『駒沢大学大学院国文学会論輯』第十二号、一九八四年二月)が、宇治川などを中心に彦星と織女を想起させる表現があることなどを指摘し、吉井美弥子「浮舟物語における七夕伝説」(『読む源氏物語』読まれる源氏物語)森話社、二〇〇八年、初出一九八八年)は、浮舟物語にみえる七夕表現の特徴について、浮舟は、七夕伝説を想起させながらも織女たりえない女君であると指摘する。また、奥真希子「宇治十帖における七夕伝説―大君・中の君から浮舟へ―」(『立教大学大学院日本文学論叢』第四号、二〇〇四年六月)は、夢浮橋巻に至るまで、物語には「七夕コードが底流している」とする。また館入靖枝「夕月夜の隠し絵―七夕伝説と末摘花・雲居雁―」(『物語研究』第五号、二〇〇五年三月)は、末摘花と浮舟には二人の男君から求愛される共

通点があること、またこの二人の状況は『万葉集』にある人麻呂歌との関係があることを指摘し、同「続・夕月夜の隠し絵―末摘花から浮舟へ（七夕伝説を紐帯として）」（『源氏物語』〈読み〉の交響―新典社、二〇〇八年）では、末摘花と浮舟は七夕伝説に関する共通点があると述べる。さらに徳岡涼「宇治十帖と七夕の歌について」（『国語国文学研究』五〇号、二〇一五年三月）は、薫と匂宮の詠歌や心内語にも七夕歌の影響が認められるとする。なお館人氏には、末摘花と花散里から織女の姿を見出す論稿「末摘花と花散里―その織女性と神性から―」（『源氏物語』〈読み〉の交響Ⅲ―新典社、二〇二〇年）もある。

(3) 「召人」については、阿部秋生『源氏物語研究序説』（東京大学出版会、一九五九年）が、「自分の仕へてある主人又は主人格の男性と肉体関係を持つてゐる女房のこと」とする見解がほぼ定説となつてきた。さらに阿部氏は、「男女相互の愛情関係を基礎にして始まるものである」とも述べるが、これに対して異論を唱えたのが、古田正幸「召人」と『和泉式部日記（物語）』の女の差異（『平安物語における侍女の研究』笠間書院、二〇一四年、初出二〇一二年）である。古田氏は、「うつほ物語」の「召人」が「衆人」の意を有していることから、貴人から一方的に「召される」という身分差から発する関係だと述べる。青島麻子「髭黒召人の前景化―真木柱巻の方法をめぐる―」（『源氏物語 虚構の婚姻』武蔵野書院、二〇一五年、初出二〇〇九年）や、池田大輔「めしうど」という矜持―『源氏物語』の侍女を『和泉式部物語』の「女」から読み解く―（『源氏物語』〈読み〉の交響Ⅲ―新典社、二〇二〇年）は、召人の立場について、女君と女房との境界の曖昧な存在であることの特徴として捉える。

また、浮舟が召人であるとする指摘は、三田村雅子「召人の

まなざしから」（『源氏物語 感覚の論理』有精堂、一九九六年、初出一九八六年）が「召人で、形代で、かつゆかりである女」と述べ、東原伸明「召人浮舟入水と続編の物語主題―身代りの〈生〉の反復と離脱―」（『高知女子大学文化論叢』八号、二〇〇六年三月）は「召人の子」は、そのまままた、「召人」であるだろう」とし、諸井彩子「召人」考（『撰関期女房と文学』青簡舎、二〇一八年）は、「召人」の子であり、自身〈召人〉やそれに準ずる女房に近い存在として扱われる」とする。

(4) 久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、一九九九年）。

(5) 『芸文類聚』（上海古籍出版）巻四、歳時中、七月七日所収。『続齊諧記』の「七夕牛女」は佚文のため、『芸文類聚』より引用した。詳しくは、王國良『續齊諧記研究』（文史哲出版）。

(6) 中村裕一『中国古代の年中行事』（汲古書院、二〇一〇年）に詳しい。

(7) 引用は『日本古典文学大系』（岩波書店）に拠る。

(8) 引用は『新編日本古典文学全集』（小学館）に拠る。

(9) 小島憲之「萬葉集七夕歌の世界」（『萬葉集大成 作家研究篇 上』平凡社、一九五三年）。

(10) 吉川英治「平安朝七夕考説―詩と歌のあいだ―」（『中古文学と漢文学Ⅰ 和漢比較文学叢書第三巻 汲古出版、一九八六年』、同「平安朝七夕再説―『古今集』誹諧歌を起点として―」（『古今集と漢文学』和漢比較文学叢書第十一巻 汲古書院、一九九二年）。

(11) 引用は、『新編国歌大観』（角川書店、一九八五年）に拠る。

(12) 引用は、『うつほ物語』は室城秀之校注『うつほ物語 全改訂版』（おうふう、二〇〇一年）に、『伊勢物語』『平中物語』『落窪物語』『枕草子』は『新編日本古典文学全集』に拠る。

- (13) ここで示す注釈書は以下のとおりである。野村精一編『孟津抄』(源氏物語古注集成、桜楓社、一九八二年)、山岸徳平校注『源氏物語』(日本古典文学大系、岩波書店、一九六三年)、玉上琢彌校注『源氏物語評釈』(角川書店、一九七三年)、阿部秋生他校注『源氏物語』(日本古典文学全集、小学館、一九七六年)、阿部秋生他校注『源氏物語』(完訳日本の古典、小学館、一九八八年)、阿部秋生他校注『源氏物語』(新編日本古典文学全集、小学館、一九九八年)、石田穰二他校注『源氏物語』(新潮日本古典集成、新潮社、一九八三年)、柳井滋他校注『源氏物語』(新日本古典文学大系、岩波書店、一九九七年)、石埜敬子編『国文学「解釈と鑑賞」別冊 源氏物語の鑑賞と基礎知識 東屋No.6』至文堂、一九九九年六月)、山崎良幸、和田明美共著『源氏物語注釈』(風間書房、二〇一四年)。
- (14) 『日本国語大辞典 第二版』(小学館、二〇〇一年)。
- (15) 前掲注2、吉井論文。
- (16) 前掲注2、奥論文。
- (17) 引用は、『新編日本古典文学全集』に拠る。
- (18) 検索は、伊井春樹編『CD-ROM角川古典大観源氏物語』(角川書店、一九九九年)及び、ジャパンナレッジを使用した。
- (19) 浮舟が川の対岸から渡ってくるこの意味については、藤井貞和「浮舟と「思ひ寄らぬくまな」き薫」(『源氏物語論』岩波書店、二〇〇〇年、初出一九八三年)が、形代としての浮舟の在り方を宇治橋との関りから指摘し、原岡文子「境界の女君―浮舟―」(『源氏物語の人物と表現 その両義的空間』翰林書房、二〇〇三年、初出一九九八年)は、「二つの世界を繋ぐ」境界から現れた浮舟の自身の境界性の空虚なことを指摘する。また、高橋亨「宇治物語時空論」(『源氏物語の対位法』東京大学出版会、一九八二年、初出一九七四年)は、夢と現実世界との

- はざまに身を置く薫をとおして、宇治という場所の意味を問う。
- (20) 三田村雅子「(邸)の変転・焼失・移築・再建の宇治十帖」(『源氏物語の思惟と表現』新典社、一九九七年)、二九〇頁。
- (21) 明石の君と七夕伝説との関りについては、先行研究において指摘がなされてきた。植田恭代「松風巻末の明石平御方―川づら―から「山里」へ―」(『源氏物語試論集』論集平安文学四勉誠社、一九九七年)は、歌語「年のわたり」や大堰山荘の位置などに着目し、松風巻における七夕の雰囲気を読み取る。さらに、岡田ひろみ『源氏物語』松風巻(大堰川のわたり)考(『詞林』第二七号、二〇〇〇年四月)は、歌語「浮木」や七夕表現などから、松風巻には「神仙的世界」が表出されているとする。また、於国瑛「源氏物語」松風巻の明石君と七夕伝説再考(『日本文学の中の「中国」和漢比較研究の現在』『アジア遊学』一九七号、二〇一六年六月)は、松風巻に見受けられる「契り」の語に着目し、七夕伝説の影響を指摘する。
- (22) 薫は宇治に浮舟を「据え」ていること自体を「隠し」ており、匂宮は「隠された」浮舟を探し当てる。石井正己「隠し据えられた女、浮舟」(『学芸 国語国文学』第三十二号、二〇〇〇年三月)は、宇治に置かれる浮舟の処遇について「隠しおく」「隠し据え」というかたち「隠し据え婚」であると述べ、また、井野葉子「(隠す/隠れる)浮舟物語」(『源氏物語 宇治の言の葉』森話社、二〇一一年、初出二〇〇一年)は、そもそも浮舟の身は生まれた時から「他者から隠される」ものであることを述べ、「他者から隠される」ために移動していく浮舟の在り方を指摘する。
- (23) 匂宮や薫が浮舟の身分を女房階級と捉えていることについては、以下のような記述からうかがえる。匂宮と浮舟が初めて契りを交わした翌朝、「御手水などまゐりたるさまは、例のやう

なれど、まかなひめざましう思されて、「そこに洗はせたまはば」とのたまふ」(浮舟⑥一二三〇)とあり、匂宮の手水に奉仕する浮舟の振る舞いから、薫が普段から浮舟を自らの手水に奉仕させていたことがわかる。また、「姫宮にこれを奉りたらば、いじきものにしたまひてむかし」(浮舟⑥一五五)と、匂宮が浮舟を女一の宮の女房にしようかと考えていることや、薫が匂宮と浮舟の関係を知った際、「さやうに思す人こそ、一品の宮の御方に人二三人参らせたまひたなれ」(浮舟⑥一七六)と、浮舟が女一の宮の女房になる可能性のあることが語られている。これらのことから、浮舟の処遇が〈召人〉であることが考えられる。

(24) 浮舟が匂宮と宇治川を渡って対岸の隠れ家へ過す際、「明け暮れ見出す小さき舟に乗りたまひて、さし渡りたまふほど、遙かならむ岸にしも漕ぎ離れたらむやうに心細くおぼえて……」(浮舟⑥一五〇)と描写される。この情景は、天の川を男女が舟に乗って渡ると詠まれる『万葉集』一五二七番歌の「妻迎へ舟」を想起させる。ここで宇治川もまた、天の川であり、浮舟が川を「渡る」行為は通常の七夕表現からは逸脱している。ただ、匂宮(牽牛)との逢瀬を待つ喜びや哀切をその胸に抱く浮舟には、これまでみてきた七夕表現の中で唯一、織女の心が重なり合っているといえよう。

(25) 中将の君が明確に意識していたのは浮舟の異母姉妹にあたる中の君であったが、実は中の君自身も、匂宮との関係を七夕に喩えている。「げに七夕ばかりにても、かかる彦星の光をこそ待ち出でめとおぼえたり」(総角⑤二九三)と、中の君は匂宮を「かかる彦星の光」と形容する。対して自身は、「七夕ばかりにても」匂宮の訪れを待とうと思う。①②の中将の君の心内語と、中の君の心内語にある表現が重なっている部分のあるこ

とが興味深い。ただし、この時中の君は宇治の八の宮邸に匂宮を通わせており、中の君と浮舟の七夕表現は、その処遇を表す点において差異化されているといえる。

※『源氏物語』本文は『新編日本古典文学全集』より引用した。

(一)内は、巻名・巻数・頁を示している。それ以外の作品の引用本文については、その都度、注記した。ただし、いずれの引用本文も、私に表記を改めた所がある。

【付記】本稿執筆にあたり、水口幹記氏より『続齊諧記』の解釈についての貴重なご教示を賜りました。また佐野誠子氏には『続齊諧記』の佚文に関しての懇切なご教示を賜りました。厚く御礼申し上げます。

(おおたけ あかり 本学大学院博士後期課程)